

2024年度

意思決定支援モデル事業
－18歳の選択について－

報告書

横浜国立大学
D&I教育研究実践センター



目次

- 01 ー 3年次計画
- 02 ー モデル事業について
- 03 ー 教育課程の特色
- 04 ー 学校における事業展開
- 05 ー 地域における事業展開
- 06 ー R6年度から見えた課題
- 07 ー 次のステップ

01 3年次計画

横浜市立若葉台特別支援学校では
18歳(高等部卒業・そして成人)と卒業後の豊かな人生を歩むために
自分らしい生き方のために
学校ではどのようなことをどのように学びどのような資質・能力をつければよいのか
研究・実践を進めていきます

令和6年度

- 意思決定支援とはなにか、全教職員で共通理解をもつ
- 意思決定支援に必要な資質・能力を令和7年度～令和9年度中期学校経営方針に反映させる
- 人的・物的環境整備～トーキングマット実践を通して、安心できる人、理解してもらえる人増やす
- 意思を表出できる場面や場の設定を行う

令和7年度

- 意思決定を支える資質・能力を育成する
- 意思決定をするための適切な情報を提供するとともに豊かな経験をさせ土壌を育成する
- 意思形成支援を意識した授業を展開する
- ◎他の特別支援学校に情報を提供し、実践内容も共有する

令和8年度

- 意思決定支援モデル事業を市モデルとつなげるための情報を発信する○市教委から横浜モデル(案)の発表
- 意思実現支援を目指して、本人の意思が日常生活・社会生活に反映できるように、本人や支援者(保護者)と共有するとともに、支援者に適切に接続する

02 モデル事業について

1 趣旨

特別支援学校に在籍する生徒が、自身の将来の生活を具体的にイメージし、自らの意思で卒業後の進路などを選択・表明できるようにすることを目的として、モデル校を設定し、意思決定を支える支援方法やツールの活用を含めた環境整備に取り組めます。

2 目的

- ① 各教科・活動を通じて、生徒が主体的に意思を形成し、それを表明・実現していく力を段階的に育てることで、高等部卒業時の進路選択や日常生活における意思決定、さらには卒業後の社会生活における意思決定支援へとつなげていきます。
- ② 卒業後の社会的自立に向けて、生徒の自己理解を深めるとともに、主体性や協働性を育成し、困りごとを周囲に相談する力(相談力)を高める実践を通じて、児童生徒のキャリア発達を促進します。

3 これまでの取り組み

- ① 若葉台特別支援学校知的障害教育部門高等部では、1年次から3年次までキャリア発達を促す教育を柱とした教育課程を実施しています。特に、「キャリアデザイン相談会」では、生徒が自身の課題について他の生徒と相談できる場を設けており、相談を通じて「相談してよかった」「課題が解決できた」と実感する経験を重ねることの重要性を認識しています。
- ② 就労後も、生徒が自ら困りごとを他者に相談できる「相談力」の向上が見られています。
- ③ 他の市立特別支援学校(肢体不自由教育部門)においては、タブレット端末の教育用アプリを活用し、授業や行事、現場実習の振り返りを活動写真などとともに記録する取組を行っています。これにより、比較的重度の障害のある児童生徒においても自己理解が深まり、自身の意思を表出する力の向上が確認されています。

(横浜市教育委員会事務局特別支援教育課説明文書より一部抜粋)

03 学校における展開

令和6年度は、主に人的・物理的環境の整備に取り組むとともに、トーキングマットを活用した実践が学校現場で可能かどうかを検討し、その実践経験を積むことに注力してきた。

その中で、知的障害教育部門高等部1年生に対する「意思決定支援」の具体的な取り組みとして、学年会において「コース選択」の支援を提案した。生徒が自らコースを選択できるよう、ふりかえりシートや教育相談を通じて自身の考えや気持ちを整理し、それを表出(伝える)することを支援した。

01 ————— 職員研修 —————

意思決定支援に関する専門的知見を有するSDM-Japanに研修を依頼し、オンデマンド教材を作成してもらうことで、全教職員が意思決定支援の基礎理解を深めることができた。

02 ————— トーキングマット基礎研修 —————

知的障害教育部門の教員6名、肢体不自由教育部門の教員3名を対象にトーキングマット研修を実施し、実践的な活用が可能となるよう普及を進めた。

03 ————— トーキングマットを活用した教育実践 —————

夏季休業明けには、教員が主体となり、生徒28名を対象にトーキングマットを用いた教育相談を実施した(テーマ「夏休みの生活」)。

冬季休業明けには、研修を受けた教員を中心に、翌年度の職業コース選択に向けた意思決定支援を行った。

04 ————— 事業実施運営協議会の立ち上げと運営 —————

専門機関(SDM-Japan)を交えた事業コアメンバーによる事務局会議は3回開催された。また、その他、事業運営協議会以外の場面でも、地域担当教員や学校担当教員が個別に専門機関へ相談を行い、事業のコンサルテーションを依頼することで、より実践的な支援体制を整えた。

教育実践の評価 ～夏の教育相談～

1 実施内容

若葉台特別支援学校知的障害教育部門高等部の生徒28名を対象に、トーキングマットを活用した教育相談を実施した。教育相談のテーマは「夏休みの生活」とし、スケールは生徒の実態に合わせて「できた・どちらでもない・できていない」「満足している・普通・満足していない」と設定した。

2 方法

生徒(Thinker)および教員(Listener)の有効性等に関する感想を分析対象とし、KJ法を用いて分析を行った。分析結果は別紙1に示す。

3 結果

生徒の評価(表1)によると、トーキングマットの有効性に関する評価が最も多く、特に「話しやすさ」に関する感想が最も多く寄せられた。教員の評価(表2)でも、トーキングマットの有効性に関する評価が多く、特に「会話の広がり」と掘り下げ」に関する感想が最も多い結果となった。

4 まとめ

教育現場においてトーキングマットを使用することの有効性が示唆された。今後も実践を積み重ねて、普及可能性検証のための教育現場での使用における注意点等も併せて検討していく。

表1 生徒の評価

カテゴリ 【3】	サブカテゴリ <10>	データ数 (33)	データ例
【トーキングマットの有効性】	<話しやすさ>	(8)	カードがあった方が話しやすかった。中学校の頃にもカードを使って話をしていたので話しやすかった。
	<視覚的な分かりやすさ>	(6)	カードを置いて目で見ると改めて充実していたかと分かった。
	<自己の振り返り>	(4)	夏休み中にできたこと、できなかったことがわかっていい。
	<表出方法>	(3)	表現とか自分が言葉で伝えることができないため、カードを使った方が相手にわかりやすく伝えることができました。
	<次回への意欲>	(3)	カードはあっても良い。次は9月くらいかな。
	<楽しさ>	(2)	カード系だと楽しい。
	<主体性>	(1)	カードがあっても、自分で話をするのでよかった。
【どちらでも良い】	<どちらでも良い>	(4)	カードはあってもなくてもどちらでもいい。
【否定的な意見】	<心理的なプレッシャー>	(1)	トーキングマットは別にいらないと思う。心理的にプレッシャーに感じた。面倒くさい。こんなものがあるから無理。
	<周りへ知らせること>	(1)	周りに見せなくてもよい。

表2 教員の評価

カテゴリー 【4】	サブカテゴリー <14>	データ数 (47)	データ例
【トーキングマットの有効性】	<会話の広がりと掘り下げ>	(6)	普段は話を長く続けることが難しい生徒(一言で終わってしまう)だが、カードがあると後から振り返りができ、話を掘り下げて中身の詰まった教育相談になった。
	<視覚的な分かりやすさと振り返りのしやすさ>	(5)	カードがあると視覚的に自分の行動がわかるため、振り返りには使いやすいと感じている様子。
	<普段相談できないこと>	(5)	いつもならできた話しかしなが、「夜更かしした」「宿題で進まないところはあった」ことを自分から話してきた。
	<テーマに沿った相談>	(5)	カードがあることで、テーマに沿って話すことができるため、とても話しやすそうに感じた。
	<話題の切り替えと修正>	(4)	会話の切り替え、話題の修正のためにカードの活用が有効であると感じた。
	<学校以外での過ごし方の把握>	(4)	SNSというカードから本人が新たにチャットをしていることなど、様々なことがわかり、トーキングマットは効果的だったと考える。
	<生徒の発信のしやすさ>	(3)	カードがあった方が本人の発信が多いように感じた。
	<主体性>	(2)	カードを渡すごとに質問していくことで、普段よりも主体的に話をすることができた。
	<相談のとっかかり>	(2)	相談のとっかかりとしてカードが有効であるように感じた。
	<楽しさ>	(2)	ゲーム好きなのでカードゲーム感覚で楽しめたように思えた。いつもより雰囲気がやわらかく笑顔が何回も見られた。
【実態に応じた活用】	<対象生徒の気づき>	(2)	返却された宿題(未記入の部分あり返却)はいつまで提出か、自分で確認してきた。
	<カードの必要性>	(3)	会話の修正も可能であるため、日常生活に関してカードの活用はなくてもよいかも。
【今後への期待】	<継続することへの期待>	(2)	慣れていけば使ったほうがよさそうな雰囲気。一回目なので初めての物への違和感がある。
【Lithnerの課題】	<話や時間の配分>	(2)	「友達の恋の相談にのっていたこと」が、本人の愚痴として話の配分が大きかった。

教育実践の評価 ～夏の教育相談～

1学年 教育相談

- 1 期間 8月27日(火)～30日(金)
- 2 場所 各教室
- 3 対象 1学年全員 担任が個別に面談
- 4 方法

(1)コミュニケーションツールとしてトーキングマットを使用する

『子どもと青年年との対話 中等期』

●トピック:夏休みの生活

「わたしのからだどこから」「わたしのかつどう」から 担任間で検討しカードを抽出

●使用カード 共通にする

「わたしのからだどこから」

・宿題 ・出かける ・乗り物を使う ・ねる ・食べる

「わたしのかつどう」

・活動/趣味 ・スポーツ/運動 ・ごはんの用意 ・家事の手伝い ・友だち ・予定の管理

・SNS ・ペット ・身じたく ・試験 ・家族 ・健康に気をつける

●スケール

共通にする

●ワークシート(ロイロノート内に作成、入力)

____さん	____
トピック	____ 月 日 (写真)
トップスケール	
生徒の様子	
感想	感想
(職員記入)	(生徒記入)

(2)保存

セッション終了後の写真 と 生徒本人の感想
面談日時 トピック スケール 担任の感想気づき 等 を
各自の Ipad ロイロノート内に保存
学年職員で情報を共有する

(3)その他

3年計画で個人の記録として残す 記録用ワークシート作成等(学年)

教育実践の評価 ～冬の教育相談～

1 実施内容

知的障害教育部門高等部における意思決定支援の取り組みとして、キャリアガイダンス(CG)および教育相談を活用し、生徒が自身の考えや意思を明確に表出し、自分で選択・決定できるよう支援する。

新たなカリキュラムを追加するのではなく、既存の教育相談やCGの枠組みを活用し、意思決定支援ツールとしてTM(トーキングマット)等の支援グッズを活用する。

【学年間のテーマ】

- 1年次:「コース選択」
- 2年次:「職種選択」
- 3年次:「将来を見据えた生活設計」

これらを若葉台特別支援学校における「意思決定支援事業」と位置づけ、継続的に取り組む。

2 方法

(1)TM(トーキングマット)の特長と活用

- 具体的テーマを提示し、細分化して話す・聞く。
- 本人の発言を職員が評価しない(中立的姿勢)。
- 本人が自己評価を行い、記録を視覚化することでふり返りやすくする。

(2)教育相談の実施(冬休み明け)

- 【目的】
 - 生徒の冬休み中の生活の把握とともに、コース選択についての意識・意思を確認する。
 - 生徒自身が意思を言語化し、考えを整理し、意思決定に役立てる。
- 【実施方法(例)】① TM的手法を活用
 - スケール(できた／どちらでもない／できなかった)を活用。
 - 「コース選択」について考えられたかを明確にする。
- ② 質問項目
 - 「コース選択」について考えられたか(理由・不安・疑問等の把握)
 - 第1希望とその理由、今後身につけたいスキル
 - 家族との相談の有無、相談内容、反応
- 【記録方法】
 - TMを活用したカードを用い、本人の発言を付箋で補足し視覚化する。
 - 音声記録(本人許可を得て録音)、カードを写真で記録。

教育実践の評価 ～冬の教育相談～

3 分析方法

本調査は、若葉台特別支援学校に勤務する教員から回収した自由記述形式のアンケートを対象とし、内容分析法に基づき質的コーディングを行った。記述内容を意味単位ごとに分割・抽出し、反復的に現れるキーワードや表現をもとにカテゴリー化した上で、5つの主要テーマと14のサブテーマを抽出した。

4 結果と考察

【テーマ1】生徒の表出を促すための関わりの工夫

- ・ サブテーマ: 話しやすい雰囲気構築／発言を待つ姿勢／誘導せずに傾聴する
- ・ 考察: 教員は生徒の内発的な表出を尊重し、非言語的で共感的な姿勢を重視していた。特に「決めつけず最後まで聴く」「共感的な相槌」など、安心して発言できる環境の構築に注力していたことが明らかとなった。

【テーマ2】トーキングマットの効果

- ・ サブテーマ: 視覚的情報整理／表出支援／振り返りと自己理解の促進
- ・ 考察: トーキングマットのカード形式により、生徒は意思や考えを整理しやすくなり、言語化の補助として有効であった。また、比較や分類といった視覚的操作を通じて、生徒の自己理解が深まったという記述が多くみられた。

【テーマ3】自己選択・自己決定の育成

- ・ サブテーマ: 小さな選択の積み重ね／進路・職業選択への応用／主体性の向上
- ・ 考察: 繰り返される選択の機会が、生徒の自己決定力につながっている。生徒は「自分で決めた」という実感を得ており、それが自己効力感や学習意欲の向上にもつながると考えられる。

【テーマ4】教員の変容とスキルの向上

- ・ サブテーマ: 生徒理解の深化／意思決定支援スキルの習得／記録による教員間共有
- ・ 考察: 本実践を通じて、教員自身が支援のあり方を見直す機会となっており、意思決定支援という視点の獲得や、記録・振り返りを通じた内省・スキルアップが促進されたと考える。

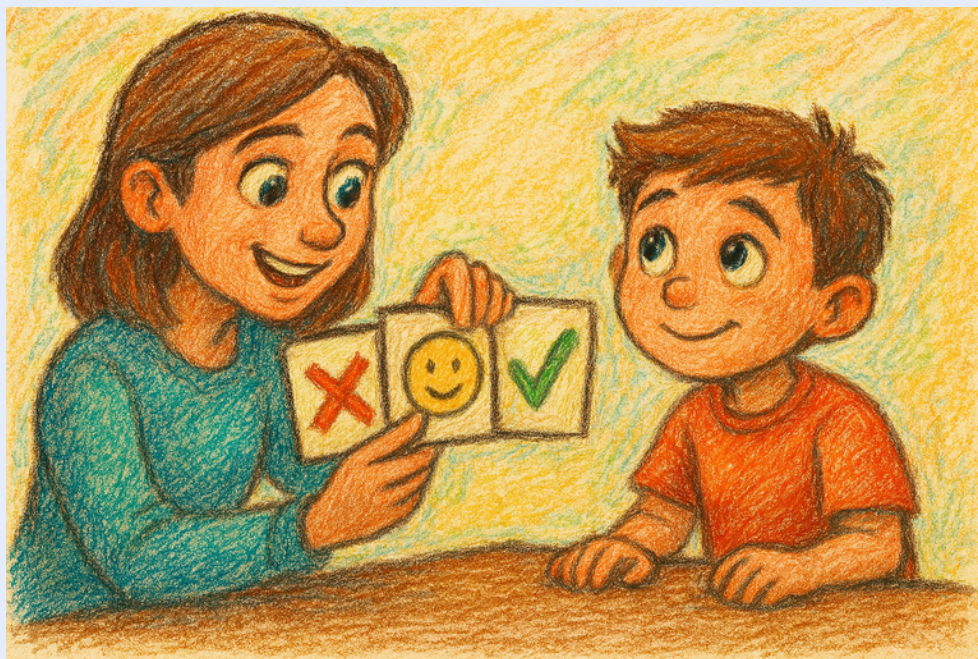
教育実践の評価 ～冬の教育相談～

【テーマ5】組織的・持続的な取り組みとしての意義

- サブテーマ: 学年間の統一実践／外部評価の受容／今後への発展的展望
- 考察: 学年全体で共通ツールとして導入されたことにより、支援の質と一貫性が高まった。さらに、外部からの評価が教員のモチベーションにもつながっており、次年度の「職種選択」への展開など、継続的発展が見込まれる。

3 評価と活用

- 本分析から、トーキングマットは単なる表出支援ツールにとどまらず、意思決定支援・自己理解・学級運営・教員研修といった多面的な教育効果を有していることが明らかとなった。
- 生徒の自己理解促進と自己決定力向上に向けた継続的な資料として活用。
- 第3回キャリアデザイン相談会シートの記入内容に反映させる。
- フローチャート形式のワークシートを活用することで、担任教員の負担を軽減する。



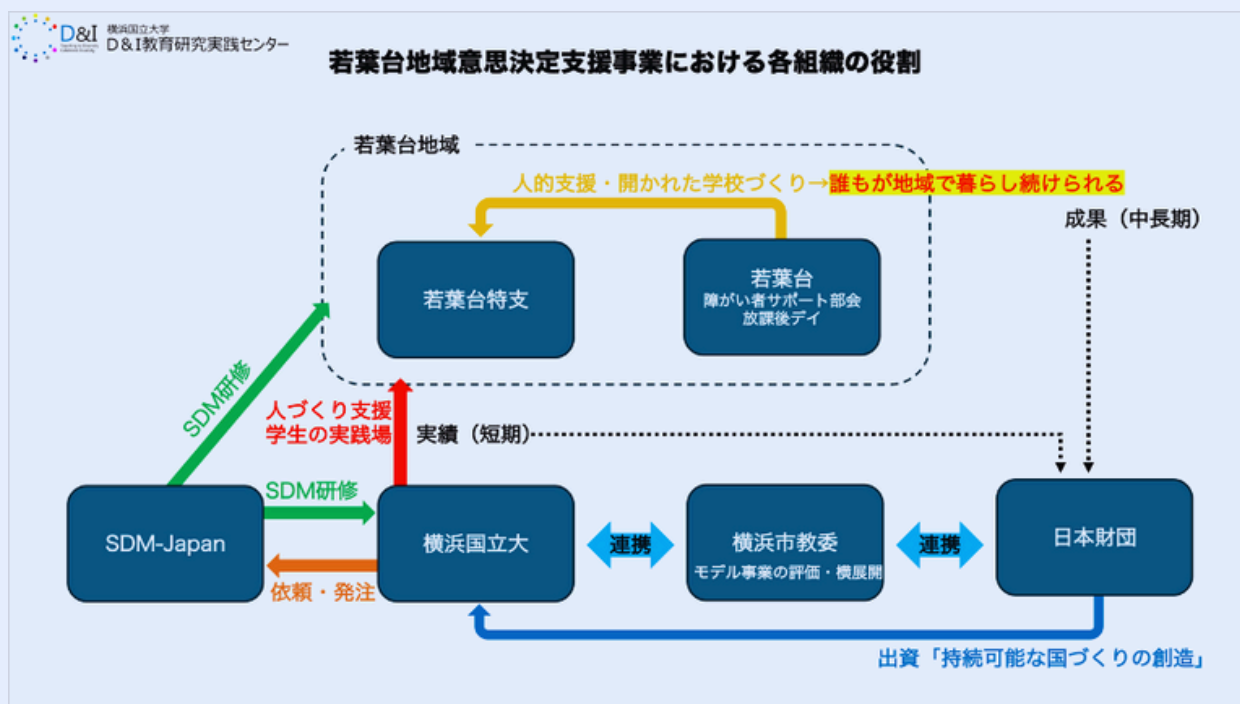
04 地域における展開

はじめに、横浜市若葉台地区の背景について述べる。この地域は1979年に入居が始まった団地群であり、年月の経過とともに他地域と同様、住民の高齢化が課題となっていた。

しかし現在では、地域活性化に向けた多様な取り組みが活発に行われており、要介護認定を受ける高齢者の割合が全国的にも低く、いわゆる「元気な街」として知られている。また、子育て世代を支援する施策も展開されており、若年層の流入によって住民の若返りが進んでいる。こうした動きが、地域コミュニティの維持・継続を可能にしている。

さらに、自治会活動の一環として「若葉台障害者サポート部会」が設置されており、本事業の受け入れに際して重要な役割を果たしている。地域の活動拠点である「ショッピングタウンわかば」内には、重症心身障がい児専門の放課後等デイサービスや障害者作業所が整備されており、障害のある人となない人が日常的に交わる環境が形成されている。

地域住民の積極的な関与を通じて、障害者が地域で自立しながら暮らし続けられるまちづくりが、今後さらに進展していくことが期待される。



04 地域における展開

01 - 障害者サポート部会 意思決定支援基礎研修① -

地域住民に対しては、若葉台障害者サポート部会の定期会議に地域担当教員および学校担当教員2名が継続的に参加し、意思決定支援に関する啓発・普及活動を行った。その結果、研修には多様な参加者が集い、地域全体での意識向上につながった。

【参加者の声をテーマ別に紹介】

■ 日常や子育てとのつながりを感じて

「一般社会共通のことだと感じた。自分の子育てにおいても本人の意思を尊重したつもり。意思決定の材料を周囲がどう用意するかが大切だと感じた。」

「自分の子育てにも言い換えなどを活かしたい。職場では非言語のコミュニケーションも大切にしているので、トーキングマットも生かせればと思う。」

■ インクルーシブな地域づくりに向けて

「堅苦しくなく日々の生活から繋がっていけば良い。行動から理解がはじまる地域づくりを進められれば。」

「身寄りのない高齢者や外国ルーツの人にも応用できる。ブレストのようなやり方も有効だと感じた。」

■ 支援者としての視点・課題の共有

「希望と現実の葛藤をどうクリアするかが課題。支援員として本人の希望を受け止める社会の環境づくりが必要。」

「施設職員が行動基準を持って関わるようにした経験がある。ツールをきっかけに行動が変わる可能性を感じた。」

■ 若葉台という地域の可能性

「全国マンション管理士の集まりで“子育てしやすい街”と紹介された。世代循環の観点でも部会の活動は重要だと思う。」

「若葉台特別支援学校の生徒に“やりたくない”という声があったのも良いこと。多様な意思を尊重する視点が広がる。」

■ 今後への期待と問い

「継続性はあるのか？成功の基準は？課題が見えれば議論の元になる。」

「“一人ではできない”という自覚をどう持てるか。地域の課題はつながりでこそ解決できると考えたい。」

04 地域における展開

02

意思決定支援基礎研修②③

本研修では、トーキングマットの基本的な活用方法を学び、実際の支援場面を想定した体験を通じて、多様な対象者との関わり方を考える機会となった。地域住民の皆さんからは、ツールとしての有効性のみならず、対話の奥深さや対象者理解への気づきが数多く寄せられた。

【参加者の声をテーマ別に紹介】

■ 対話をひらくツールとして

「会話のきっかけになれば良いと感じた。使うことで話がはずむ」

「トーキングマットは本音を引き出すことができる」

「障害の有無に関係なく、話を引き出す手段になると感じた」

■ 対象者ごとの工夫と可能性

「どの程度の高齢者や障がい者に使えるか?からのカードの使い方を試行錯誤した」

「子どもが落ち着いていない時はカードは使えないが、方法論は活かせる」

「重度重複児に使う場合、カードを置いたあとにどう広げられるかが課題。視線入力などの工夫が必要」

■ 実践での気づきと課題意識

「自分の子ども相手に使ってみて、親子で考えていることが違うとわかった」

「聞き手のためのツールではなく、シンカー(本人)のためのツールだと気づいた」

「準備(スキル)が必要。教員はつい説明しすぎるので注意が必要」

■ 活用場面の広がりへの期待

「高齢者の思いを受け止めるには有効だと感じた」

「まったく人間関係のない相手にも使えるか試してみたい」

「カウンセリングに入る前の活用は有効だと思う」

■ 研修中の印象的なやりとり(Q&A形式で紹介)

・ Q:ネガティブな話題にも使えるのか?

→ A:アドバンスセットにはネガティブテーマも含まれる。活用可能。

・ Q:メモを取っても良いのか?

→ A:気にするシンカーもいるため、様子を見て判断する。

・ Q:カードを渡す時の声かけは?

→ A:「○○はどうですか?」というスタイルが基本。過剰な説明は避ける。

・ Q:カウンセリングで使えるか?

→ A:導入場面や関係づくりの段階での活用は効果的。

05

R6年度から見た課題

01 若葉台特別支援学校肢体不自由部門においての意思決定支援

若葉台特別支援学校肢体不自由部門において、発話やカード操作が困難な児童生徒に対してトーキングマットのみでは十分な支援が行えなかった。ICTを活用した視線入力装置やタブレット端末などの代替的手段の導入が不十分であり、より多様な支援手法の整備が求められている。

02 外部専門機関および地域関係者との連携・調整課題

専門機関(SDM-Japan)を交えた事業運営協議会が年間計画の調整難航により十分な回数開催されなかった。また、地域住民やピアサポーターの積極的な参画を得ることが難しく、協議会の多様な視点の確保に課題が残った。

03 生徒の心理・行動面への影響に関する量的評価の不足

生徒の心理・行動面への影響評価が主に質的評価に限定され、意思決定支援が具体的にどの程度影響を及ぼしたかを数値的に示す量的評価が十分に実施されなかった。これにより、支援効果の客観的評価が不足している。

04 ——— 地域への普及可能性に関する課題 ———

地域住民の理解を得て前向きな参加を得るためには、障害の種類や程度に応じた支援方法の多様性や、児童への支援において保護者との連携が重要であることが研修参加者から指摘された。

06 次のステップ

01. — 若葉台特別支援学校肢体不自由部門 — における意思決定支援 ICTを活用した多様な意思決定 支援手法の導入と実践促進

視線入力装置やタブレット端末などを活用したICT技術を導入し、研修および実践の場を増やすことで、発話やカード操作が困難な児童生徒に対応した多様な意思決定支援手法を整備する。具体的なマニュアルや教材を整備し、教員がスムーズに活用できる環境を整える。

02. 外部専門機関および地域関係者との連携・調整課題 外部専門機関および地域との包 括的連携強化

年度当初に協議会や研修日程を確定し、オンライン開催を積極的に取り入れて外部機関や地域住民の参加ハードルを下げる。また、地域のピアサポーターやアドボケイトが継続的に関与できる仕組みや定期的な情報共有の機会を設け、協議会における多様な意見を確保する。



06 次のステップ

03. 生徒の心理・行動面への影響に関する量的評価の不足 生徒の心理・行動面に関する評価方法の拡充

より具体的で精緻な質問紙を設計し、生徒の意識や行動変容を量的・質的の両面から継続的に評価できる体制を構築する。また、評価結果を定期的にフィードバックする仕組みを整備し、次年度以降の支援実践を継続的に改善・発展させる。

02. ——— 地域への普及可能性に関する課題 ——— 地域普及モデル構築に向けた戦略的取り組みの実施

研修やフォロワー育成において、障害種・障害程度に応じた支援方法や保護者との連携に関するガイドラインやケーススタディを作成し、普及のための具体的かつ実践的な指針を示す。また、地域特性を踏まえた多様な実践事例を収集し共有することで、横浜モデルの地域普及可能性を高める。



謝辞

本事業の実施にあたり、貴重なお助成を賜りました日本財団様、また研修等の実施において多大なるご協力とご指導をいただきました一般社団法人SDM-Japan様に、心より感謝申し上げます。

今後とも本事業の成果を生かし、誰もが安心して自分らしく生きることのできる地域社会の実現に向けて、活動を継続してまいります。



連絡先

横浜国立大学

ダイバーシティ戦略推進本部

D&I教育研究実践センター

神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79番1号

045-339-3051

ホームページ：<https://ynu-d-i.jp>

メールアドレス：info@ynu-d-i.jp